

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館/
午前11時40分～午後1時30分
電話 56-0303 (直通)
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の
教頭先生へご連絡をお願いします。

夢物語 〈全4話中の第4話〉

北佐久郡川西が輩出した俊傑二人

しゅんげつ
いちず
～教育一途の人・五無齋と現代書道の父・天来～

立科町教育相談員 岩上起美男

立科小学校体育館に掲げられてある、現代書道の父、比田井天来先生揮毫の扁額「質実剛健」を仰ぎ見るとき、いつも必ず、この扁額の由来に強い興味を抱きます。

そこで、4年前、日本の書道史に大きな足跡を残された天来先生の「書」が、立科小学校の体育館に掲げられた経緯について、当時の校長先生はじめ、何人かの関係者の方に尋ねてみました。しかし、記録も言い伝えも残っておらず、その経緯は分からないとのことでした。

「広報たてしな」や有線放送でも、ご存知の方がいらつしゃれば、ぜひご教授いただきたいとお願ひ申し上げましたが、ご連絡はありませんでした。佐久市立天来記念館長にもお訊きしましたが、やはり特定は難しいとのことでした。

なぜ、どのような経緯で、かの天来先生の「書」が立科小学校に掲げられたのでしょうか。

5月から続く老生の夢物語は、この疑問が出発でした。

明治34年1月、天来が、五無齋からの、「明治42年開校の運びの横鳥尋常小学校に掲げる扁額を是非とも貴殿に揮毫していただきたい。揮毫の文言は貴殿に御一任致す。」という依頼に応じ、すぐ返信

を認めた。

ご依頼の件、相承ったこと、そして、揮毫する文字は、貴兄の教育実践の基底をなすと拝察される「質実剛健」とするがよろしいか、と問うた。

五無齋から折り返し書状が届いた。この2月、上京するので、その折に訪問し、御作品を頂戴したい。「質実剛健」の字句を選ばれたことに感涙を禁じ得ない、という簡潔な文面であった。

明治40年の2月、渡辺国武元大蔵・通信大臣邸を訪れた翌日、五無齋が、牛込区にある天来宅の玄関を開け、張りのある声で言った。

「ご免ください。天来殿はおられるか。五無齋・保科百助が参上仕った。」

衣紋正しく羽織袴姿の天来が玄関に現れた。紺の法被に草履履きの五無齋と対照的な身なりであったが、北佐久郡の川西が生んだ俊傑二人の視線が烈しく絡み合い、一瞬にして、呑舟の魚を目の当たりにした漁夫にも似た畏怖畏敬の念が両雄の胸に湧き上がった。

「比田井天来と申します。遠路、ようこそ拙宅まで。何の馳走とてございませぬが、しばしお上がりをいただき……。」
「かたじけないが、先を急いでおる故、ここで失礼仕る。ご用件のみでお暇致したい。」

五無齋のいかにも五無齋らしい無骨な心配りを察した天来は、書齋に戻り、「質実剛健」と揮毫した条幅全紙2枚を持参した。そして、玄関の板の間に広げた。

五無齋は唸った。

古隸の、まさしく傑作であった。五無齋は、流麗にして木簡の素朴な情趣を放つ「書」に深い感銘を覚えながらも、その作品に、天来の師、日下部鳴鶴が唱える廻腕法とは微妙に異なる筆使いが含まれているのに気付いた。

「筆法を模索されておられるのか。」

正鵠を鋭く射抜いた五無齋の問いに、天来は仰天した。よくぞ……。

後に、天来は、俯仰法という筆法を発見し、独自の書風を築いたが、この頃から、柔らかく長い穂先の筆を用いた廻腕法では何としても書けない古碑帖があり、筆法研究の必要を切実に感じ、様々な用筆運筆を試みていたのである。

五無齋は、揮毫の礼として、羊毛と鹿毛の混ざった剛毛筆を天来に手渡した。

この筆が天来の俯仰法発見に大いに貢献したことは知る人ぞ知る。

五無齋は、わずかに数分の滞在で天来宅を辞した。天来の妻、小琴がご挨拶にと玄関に出たときには、もうその姿はなく、夫、天来が独り顎の髭を撫でながら、君子の交わりは淡きこと水の如し……か、と微笑していた。